



和漢文操

辨類 頌類
說類 頌類

五

5
2286
5



のまねしるもまねなとけしも朋たのれせしむい
 幸もえちあとし幸くの雲ををけしむと親し
 七轂の御作。からゆの浦のまわ人とてしむ海に
 りあふねとも一ふたはらうらあをく三扇あふた
 けーちとーしとこを一やもめあをうてれ子
 てそと海をんれと玉帯とーもらうらんやとや
 そのまもまかひて。あふとつあふまのあーい
 桐のあふり例のけりしふそこの屋箱し達事
 とれくはらけの親あし。想感のけしとをさあ
 常史ともゆの勝さあけい各し事度のもて代

根う馬もはるるたあふた牛の遊からわーてあ
 眞のまもらふらうん。あふとーあ秋もまねをえ
 けふあといまうらとあわねのせれまのみま
 ふれーへて。れのがさーとーあを色

○註四●怨歌行新製。蘇我純素。皎素如霜雪。●王建詩。輕
 羅。扇。流螢。○秋扇。ノ詩歌。數多アリ。美キル。及ハス
 ▲鞍馬山ト神谷川ト。行ト。緋ト。各所ナリ。海申毛。神谷。幾トアリ
 ▲美川以下ノ四人ハ。中古ニ傳世。繪ノ各人ナリ。▲傳サ。細言ヲ。枕
 草。帝ニ扇。骨ノ珍キヲ。答ルト。云。けし扇のよあてくけ
 のうやとそり。▲高僧傳ニ。法顯ニ。燕ノ天竺ニ。渡リ。見
 白繪扇ヲ。不覺。懷下。云。或抄。六中。啓ノ。詔アリ。後。勅ス。

とぞうてかゝるる書すの歌也といふことふれぬ
とるふ事のと地と林とらんやうて不意のこころ
とて空の舞の舞調とそあはるる新張のたこた
るるく起張のたこたにみるこころ

團圓贊 並序

僧馬泉

いふより我の心と和訓とすいふあはれと
和れどもとるに團圓とす和訓といふあはれ
とるがうと和訓の書はとる團のこころ
まゝなり海ととるに和訓も歌も和訓といふ
かゝるる書訓のやうに和訓とすいふあはれ

團圓も孔明の羽扇もとるに和訓とすいふあはれ
と二つの名ありとるに和訓といふあはれ
和を和ととるに和訓といふあはれ
かゝるる書訓のやうに和訓とすいふあはれ

其贊

礼云樂云 團圓各面
時鳥又暉 拂塵隱ル
信玄 叙甲 兒玉 家紋
母乃 追蚊 無常 崇佛
郊 花 明 曙 招 風 讀 文
胡 馬 益 鳳 有 意 怨 君

若化尊去 駕言遊雲

○註曰論語礼樂之有公前出たり ▲軍史ニ甲斐ノ信玄ノ
 床ルニ腰ヲ掛テ軍配ヲ収ル國ハ信州ノ中嶋ニテ謙信トノ
 軍ナリ△兒玉堂ハ關東ノ武士ナリ團ヲ以テ統テセリ ●五選
 詩益作秦王女事李向煙霧良註言益北於扇上以裏
 之李亦鳳也列仙傳秦穆公ノ女ナリト ▲和泉ノ宗原寺
 建立ノ時ニ行基菩薩ヲ道寸師ヲ本尊ヲ團信ノ翁トシテ常置
 玉ヲ置アリ ●恋ニ怨山君トハ班女ト然歌行ヲ云一ノ前ニ出たり
 挿入ニ此一對ハ聯句ニ底返ノ古法アリテ無ト有ヲ對ト常ト意
 ヲ對ス意無常トハ和歌ノ續キニテ倭文ニ字對ノ絶妙ト稱ス
 一 ●詩經邶風駕言出遊云

○評云けりやと直名ノ和訓あり一字ハ漢文ノ詔册ニ
 去リて他符ノ叶韻ノ證トシ一ハれハ序文ノ音訓ノ
 所由ト或レ團信ト音トスルハ或レ團信ト
 訓トスルハ或レ團信ト音トスルハ或レ團信ト
 字對ナリニ存スル文ノ用あり今ハけりやと
 評文トスルハ一ハ作名トスルハ山中トスルハ却テ
 亦花野ト評トシテ柳野ノ子トカサむルハその由
 不重トスルハ或レ院トスルハ我直言ノ字匠也

福神贊

長江舟

世界ノ海ノ中ト云ふあり今ハ舟ト云ふあり

世にまほといのれとも命といのる人ふされしは
 上神といひく今を言はあく社におく家へ行く
 と眼えあるまうを言ふ者とまことさむいさしむを
 命者の神といひむららぬ命者の命といふれいと
 せけふ神といひけら法ありく辯文夫の虚空界の
 神ありくちり中し観音大士は御神はたれ
 ちるうて補陀洛界に形とわく唐といひや
 又世といひて邪をいふはまことといひて一
 の奥といふはまこと今之越後石の墓といふ
 一法二種の虚言のつてしりし里といふは

といふ回ありたれ中より真菊摩磨とて神の言
 神勤のありまもまも言はとまもいふやれを命神の
 さういともあはくおまきの神といふは木の
 言のたおれもかたれいふやあはけを言は
 神御のくといふ言は神禰とてまもいふは新加と
 まもいふも人の知ると不知はたり我方の命神と
 まはといひいふやけ津の神も高くと近思録といふ
 唐却記といふはまもいふは神の言はまもいふは
 の神といふは命一神といふはまもいふはまもい
 言はまもいふはまもいふは

○評云は紙と例の被捷よりしてははるるも交記ふるを
 を一々の称する不と食名の袖とみんらと袖を此
 食とあそびゆくは佛仰のる美りも老若の二に同じく
 説するおちるとしては能活の微中より二をせしむるは神
 とせしめしめて弁文夫と虚空を非と仰の起結
 観音大士と鳥羽の摩と文中の字をさくしては
 ありの遺教の知足といふて食福の二字と結
 近くと一編の親疎といふ遠くとも百四の意訓は
 作者と長野氏よりして越の新修の意を此柱とてに獅子
 の親よりして鑑するの西翼より一南人の所子の標号

卷二の賛

蓮二の房

五子、四

繫糸而不喧

蓮二云

にあはれしと作と云

○評云は紙と例の被捷よりしてははるるも交記ふるを
 ありたは懸くと論議は五子の詞ありは活活と不、食の
 とはらうて不喧のこまよも形とんこれと二の若
 ころあやうはとては兼申して儂の大ま四
 その比とお葉の名ありて

ほのちねもあはれと云

之類圖類

東華坊

世傳醋吸之圖者塩梅儒教老之之道而
酸其耳其苦其所謂人之好不好與不然
厚有世界謂物教奇事而飽不有耳兮不
有苦兮其麼月夜之本殿則其其殿而
譽少所酸了也增而好細豆人者譽其為
體臭不哉孰厚謂道之是全孰厚謂道之
非矣攻乎異端斯害也已抑謂太極之道者
從本一助之道也其分千車万馬之歧而可

者打鳴念佛之鉅宛或者橫倒參禪之捷
宛此耶尔者詭虛兮彼耶尔者詭實兮儒
家結五常之垣則佛門張五戒之綱而互
斷從來之道則老子者說手振千貫而割
性兮折衝兮為家天地而鏡麼不卸特獲
我好之道與所率哉謂佛諸之道者級合
之家之意味而塩梅扣漫之風推了則人法
有從孔子之訛諛居心法者傳教子之虛靈
些久法者效在子之形容歷然則非儒兮
非佛兮不構老在揚墨之一城兮假令謂

我如孔子之御經共知言語之用與無用
 了則其虛廢合點之其實廢合點之何益
 可美暗許之黑豆泉矣從善而嗜人極廢
 欲毀而遊者俳諧之談笑也尔去乘人之
 公味線而遊芳野山之花了。靡難波浦之
 以而頰霞兮頰霞兮頰于月于雪也則立
 合點人取之憂各而成景學文之日備也矣
 二之所能察我言之虛妄而學而思兮思而
 學兮知今日之用與無用則元買博豐于
 之鏡古而看破獅子庵之遺稿矣爾有則

所謂之人行則必有我師焉合點又殊之
 智惠乎此圖者頰儒佛老之內證而可謂
 俳諧一宗之拜物矣夫

○註曰醋吸三聖母多手圖ナリ近久繪本抄ニ註解アリ
 △俳諧拾芥何モ月夜ニ粟汁末湯ト云ルハ末飯ナリト
 △及ハ米飯ト平話ニ讀レシ △異端ハ論語ノ全文ナリ抑
 スルハ語ハ政字ヲ治字ノ論アリ孔子ノ意ヲ察スルハ道ハ家ハ
 ノ建流アリテ佛老モ揚墨モ一理アルハ辟言ト我ノ家ノ建立ニ
 自ヲ答言テ他ヲ毀ルハ實ニ怒リテ重責ハカラストフ石ハ先後抄
 ノ取意ナリ △五常五戒ハ儒仏ノ制法ナリ細奉スルニ及
 ハス△老子割牛折衛ハ天地家モ其類取意ナリ抑スルニ

手振千貫、一錢ノ其手モ持タス大商ノ平話ト云老子
 ノ五千余言ヲ縮テ四字ニ詠着スト云ケシ此等ヲ奪胎
 トモ換骨トモ云ハ詠諧ノ絶妙ト称スシ △家語子白
 諫君有_リ五美_{中畧} 五_六諷諫唯_レ度_レ主_レ而_レ行_レ之_レ吾_レ從_レ記諫
 手トアリ史記滑稽傳_中齊_中常_中以_レ談笑_中諷諫_中云_中△公孫心_中本
 虛_中吳_中氏_中禪_中詔_中虛_中吳_中不_レ時_中臣_中總_中心_中之_中實_中蘇_中十_中更_中之_中△莊子
 形容_中ノ_中客_中ヲ_中尽_中セ_中リ_中總_中テ_中俳_中諧_中ノ_中數_中舞_中ナ_中リ_中△_中段_中六_中三_中章_中
 ニ_中掌_中ノ_中法_中アリ_中テ_中俳_中諧_中一_中道_中ノ_中内_中證_中ト_中云_中シ_中諷_中諫_中ハ_中本_中言_中リ_中滑稽_中旨_中
 ノ_中本_中懷_中ニ_中シ_中テ_中虚_中吳_中ハ_中言_中詔_中優_中游_中ヲ_中云_中ク_中形容_中ハ_中文_中章_中ノ_中的_中當_中
 ラ_中云_中ル_中多_中ク_中世_中賢_中ノ_中骨_中節_中ニ_中シ_中テ_中俳_中内_中ノ_中虚_中妄_中ハ_中空_中ス_中キ_中ナ_中リ_中
 △禪_中錄_中暗_中黑_中豆_中老_中和_中高_中ト_中均_中ノ_中明_中ス_中ト_中云_中フ_中單_中詞_中ナ_中リ_中 △_中味_中線_中ハ

之_中線_中ナ_中リ_中ハ_中云_中フ_中ノ_中通_中テ_中音_中詔_中ト_中俗_中習_中ニ_中從_中テ_中味_中字_中ヲ_中加_中テ_中和_中詞_中
 ニ_中細_中訓_中アリ_中多_中ク_中芳_中野_中山_中ト_中云_中ク_中向_中山_中ト_中云_中テ_中之_中線_中手_中之_中新_中千_中載_中
 一_中ハ_中あ_中り_中人_中ノ_中あ_中ら_中る_中を_中班_中ゆ_中く_中之_中を_中備_中ふ_中と_中云_中フ_中也_中
 難_中波_中ニ_中善_中悪_中ノ_中數_中多_中ク_中ナ_中リ_中△_中学_中文_中ノ_中日_中備_中ハ_中白_中馬_中ノ_中詞_中△_中文_中章_中
 訓_中ニ_中ま_中じ_中ム_中當_中時_中ノ_中学_中者_中進_中メ_中乃_中其_中の_中長_中と_中知_中レ_中ク_中也_中ト_中云_中フ_中也_中
 一_中此_中と_中云_中フ_中ま_中じ_中ム_中之_中言_中ハ_中作_中メ_中故_中ナ_中リ_中右_中決_中と_中同_中ナ_中リ_中マ_中子_中ト_中
 自_中己_中ノ_中檢_中用_中ナ_中リ_中ハ_中云_中フ_中と_中云_中フ_中之_中の_中以_中備_中ト_中云_中フ_中也_中ト_中云_中フ_中也_中
 世_中一_中段_中ハ_中之_中線_中ノ_中手_中ヨ_中リ_中芳_中野_中山_中ト_中云_中テ_中難_中波_中浦_中ニ_中向_中テ_中對_中シ_中言_中詔_中ノ_中善_中
 惡_中ニ_中語_中ヲ_中寄_中ス_中ハ_中今_中點_中人_中形_中ノ_中詠_中諧_中ナル_中学_中子_中文_中日_中備_中ノ_中的_中當_中ナル_中
 也_中等_中ハ_中例_中ノ_中斷_中續_中ナ_中カラ_中文_中ニ_中裁_中斷_中ノ_中絶_中妙_中ト_中称_中ス_中シ_中△_中論_中詔_中ノ_中善_中
 不_中思_中則_中固_中思_中而_中不_中學_中則_中殆_中△_中高_中僧_中傳_中ニ_中寒_中山_中指_中得_中ハ_中文_中殊_中
 善_中賢_中ノ_中化_中身_中ナ_中リ_中ト_中豐_中干_中和_中尚_中ノ_中教_中ヲ_中依_中テ_中向_中丘_中嶺_中ハ_中國_中情_中寺_中ニ

往テ西僧ヲ親セシト豊干鏡台、法陀ト云テ實ノ不明ヨリ逃去リ又
ト鏡台トハ口メテト夏ナリト云テ人行ノ語ハ論語ノ全文ニハ文殊ニ
智恵ノ直ハ細拳ニ及ス之人寄ハ文殊ノ智恵トハ本朝ノ國語
ニテ孔子詞ノ起結ナリト掬スニ子以下ハ豊干ノ鏡台ニ語ヲ
起シテ寒山拾得ノ風狂ヲ以テ蓮ニト白狂トニ喩スニ類ノ秘
訣ハ此段ニ看破スニ然レハ今云フ之類ハ國相中ニ半身ノ像
アリテ東華坊ト蓮ニ房ト渡部在トナリ其國ハ大和詞
ノ首トニ出タリ

○蓮ニハ國ヲ椰子庵ノ遺行ナリテ或レハ文殊ノ語アリ
或レハ蓮ニノ種アリトありつるハ蓮ノ名アリ也
あゆむくくつむくも淋しゆりせしむふしむの癖ハ
むく互見井の抱ね者より尾城のをり庵よりく國と

写シ世とのハ心教ももそと因一テ高僧ノ又幅々
七幅もある一ハこれハ國の中橋といふと蓮ノ遺行
ノ祖房の命とあひく此語の世法と百世ノ傳人トモ
いああうらしむ世傳の大任あるより椰子庵ノ又細の
遺稿とほして今や天下の公道とあれる之類ハ剛の
所師と師よりして合點の二子にけ發と看破もく
まういれ子の依常と出とて空宗の二子とあち近く
るく荷擔の用とまうつる也を牛抱くと剛の遺稿也

路鳥、發

金李子潭

可く一、近來帝の御書展覧子入法とて新朝此

の帝一諸といふはる文の断接とみる言也作者は
之説の廣く上巻を合言其の能人あり

○頌類

枚子頌

伊東恕

可くは食行のこの中に食と天とて才下とる
い釈は孔子のハキ余養も毛嬭西施とす二女
言れを面白くもあぢげお我おのけしちい
△天の厚徳のみを以て婦をわけむらぬのあくお帝
一枚子のもは中よりあまの徳を感ずる句天

七代も地神み代もとてあふ下とすはく人の代あ
あふとまりし歸路のゆかぬ流く新妻の
のこもあふまりも身入るは婦もははあふと
ふ時あしはれもも名のゆりもはあふと陰か
とよもあふも久我殿のゆりおまもあふと柄枚
枚子も此言ももむいしはるは能治めは用と論
おむももら也も連音也あももらも久しは長也知
もる味増増の事詠もあふもははあふもあふも
もはる業たあふも枚のあふもももみまもあふ
かおあふももも持持のあふももももももも中

しむけぬまを神代とて持の御事とまらんと存候ま
よ及りぬともまらぬしむけぬまの信長の御事
の骨とありて我々のまるとおまらむとまらぬに
まらぬの御事とまらぬけの御事とまらぬの御事
とありぬまの御事とまらぬの御事とまらぬの御事
御事とまらぬの御事とまらぬの御事とまらぬの御事
とまらぬの御事とまらぬの御事とまらぬの御事

○註曰△管子王者以民爲天△天降橋二
道に平ノ古又日本紀に在り細草ニ及ス△度れく神久我お國
の殿とて水とてりまらぬとまらぬとまらぬの御事

そやまらぬの御事とまらぬの御事とまらぬの御事
花奈とてりまらぬの御事とまらぬの御事とまらぬの御事
つらまらぬの御事とまらぬの御事とまらぬの御事
の御事とまらぬの御事とまらぬの御事とまらぬの御事
ハ美政公の文明比ノ太平ヲ茶湯道具ナト各物多シ
▲之件末上ハ神供納付ヲ云リ神代卷ニ在リ ▲織田信長
モ武田信玄モ天下ノ七雄ト稱シテ天文比ノ各將ナリ ▲遊行
縁起ニ其和布ノ枚子ノ古又アリ八十万人決定性生トハ廻向時
ニ頂載スル秘符ナリト云フ按スニ童謡ニ枚子ニテ人ヲ招ク
必ス死スルトテ已ム古又ナリ何故ニヤ知ラヌ ▲三種神器ハ神
雨土宝剣内侍所ナリ細草ニ及ハス
○浮云けぬまの御事とまらぬの御事とまらぬの御事

しり中はと朝廷の何故うて終に仰はとあると高時
のちあると終しり位よりあるとされとの裁断との
頭解るとしりあると依吹とて越の歌の
しりも能信と柳子の歌の中へ幅對の撰を
しり桂下園を流し別花ありとて

醋貝頌

僧壺天

醋貝といせの國さるの浦よ何れとありてしり
みりたれうれうてく天のわらうた地のまがら自然
のかしらとまらうて唐名とて唐名とてしり
海し唐子の法ありて耳月窟にのちうとてか

一さの醋しるる山時を精神きとあらはれはく
いさくさく横しとありありとありとありとありと
ありとありと妹背のしりま言もいされとて揺むとて
のほろしとてち神のひしりぬれとてありとてたの
るしとてしりあるとて相思子とてありとて
を接しとてしりあるとてありとてありとてありとて
おれ^{マロロ}おれおれのまらうてつうて珊瑚琥珀のまらうてしり
とれはけ貝の頭とてありとて國忠孫成るは肉とてありと
葛中を域とて丹とてありとてありとてありとてありと
ゆらとて唐うれうてく色かるとてありとてありとてありと

控れんまのうたをうーはるあなを地ふらん

○註曰△天地の方面の前に出る△海援録に相思子大如皇女即

即君子也或云放醋中雌雄相逐使を便下也

國忠八肉屏風ノ大者アリ孫房八肉其盤を看り細承スルニ文

繁シ△神仙傳百由周代ノ仙人ナリ者域ハ天皇ノ神人ナリトフ

美丹トハ延齡丹ノ類ナリ△浦嶋ヲ故古又ハ前ニ山ナリ

○評云けふと大むね辨解ふく了強治く美園美丹の詠

詞より浦嶋のふれとつ中命一作者と書雲のまたあり

くくと新頌のふれとつ中命一作者と書雲のまたあり

廣時之殊院にほも柳眠きと雨衣の極楽なりと云

大根頌

沼潜柳

おしし我々の大根とふとむらうの蘿蔔トリて

鎮州大蘿蔔と云ふとそれ大小の辨と多しと云

へもむれときまふて織羅蘿蔔と云と我々の

くくとせらふやと云ふもや、翻訳の訛と云はれい

けゆと知らもくもね行田の里に我とちし鴨川の氷

しめとまもくも中らそめえとよひらきりり酢搦

青溪の河とわくはく友女とやとられおる婦よ

あつへ遊るを力あうりのを敵よこれるはれ月

のゆとりりもたのめ大根の名うあおひと産産

りけりゆとらんこくを産産とありてわらんん記

といふ國へのふとわらるる表はと信局のそまを運しつちり
 られ。いよ井と武陵の大名をよせしつちられた後漢
 の東の比しとてしなやされく表の比れうつり者と
 まうするちりとして法産和南よきうしてさあのおれと
 かわりしる花のこれよとよとゆひてわさし漢の
 ちよとわらるるゆて神世月の表ちり比しんと
 風見吹の尻とゆきまへ人を汁のおとていかなまの
 さいとをさうしたゆらなかまいあんとあおの親を美の
 表とむくと早に牛房の一おれをゆく世のかけよ
 思ふらとせといふゆらと神農めさうりゆけ代への

帝れきしとあらへるといふとて強さうつらふといふ
 ちりら世のりしとらとをゆいゆおとなくし
 伊吹のからことえしひとてに地すくと中めくゆい
 あらふのちとちりうと連てをくも葉のはやあつち
 うまうと能階と大根のちりうと名とよらうゆ
 といふたしのおゆらつちむおのまうとやまうれき
 しようたあしとす下のゆはありとていよとら神
 のちちあしと名の積葉とえとて大根のタケノコヒキゆ
 詞と十月の事にはさかちゆらとやまをゆ大根の
 るはしちりいして強のますとせあつちりく

○註曰△凡書記鎮州羅蘭之產也△此語六禪録ニ教アリ
 △各美其里ニ載記詠也△云△天台ヲ天樹ノ如キガイコラテイコ
 如キ回詞ノナリトス按スニ本朝ノ儒學者ニ詠字ヲ詠錯ト
 思テ詠ナリト假名ヲ附スニ復レレクノ語ニ此論アリ

△官女子ヨリ美并ニテノ對ノ相紋ニ文章ノ新語アリテ尾張ハ官ニ對
 云イ美農ハ鏡嶋ト云フ此對ハ大小ノ起結ナリ木以口接津ニ細根ノ
 相續ヲ産トス△美并ハ武藏ナリ葉大根ヲ出サリ按スニ此對ハ
 妙ニ美根ノ豔詞ヲ起シ長月ノ長字ヨリ大根ノ大字ヲ結ヘル
 尾張ト美農トハ大小ノ辨ニシテ木以口ト美并ハ玉産ノ名稱ナリ
 然レ官女子ト遊君ハ字對ト云イ句對ト云イ論セハ文對ノ絶妙ト
 稱スク美農ト尾張ハ大小ノ用ナカラ評セハ意對ノ絶妙ト
 稱スレ又文章ハ此等ノ新語ニ知キナリ ▲依産漢トハ糠漬

名ヨリ去ルヲ善薩漢トハ糠ノ名ヲ替テ潔ニ粧ヲ交ヒテ漢ニ
 交ナリトフ △神農ノ右サノ音ニ夏前ニ出タリ△此レクハ
 大根ノ化身ヲ云フト△此レハ何ナリト云フ△此レハ何ナリト云フ
 ▲猿蓑集ハ落神舎ノ撰ナリ冬部ニ大根ノ名アリト云フ
 おもありと云フ○此等ヲ選場ノ傳トト白馬ノ類説ニ評
 ありと按スレニ此等ハ四未子ノ類各ニ大根引ト云フ冬部ニ
 定キキナリト云フ○此等ヲ選場ノ傳トト白馬ノ類説ニ評
 ○漢云けし御とともをく頭解らるるなり神農の二子一
 ひととをまきくお迄の所迄と語をとりまはれ此を物
 以下のおまきくを例し文中の字はをく大根引の類し
 能治と稱して連系不敵をむとまきくを例のありと也
 作者を召使申す一ト伊勢の書名一使をまきくを例のありと也

永平巻二

○辨類

之上辨

僧丈竹

世に歌とてあそぶ人のの上の心とてあそぶ人の
鞍上松と厠ととやあそぶ一報一月信をよせり
もいささたれあはしきのまじりてあそぶ
とあそぶ人かたし況や軍中人かたと様とて詩と
あそぶ人の類のくくをかくやあそぶ或は松と連
よさくぬとるおの角くくととあそびあはれ
あそぶとてあそぶのくくあはれとて詩と

永平巻二

海家のあけりたりはらうもあそぶあそぶ松の上
とて詩とてあそぶあはれとて詩と
遊子の心とてあそぶ松上よの雲婦の腸とて詩と
あそぶ一はくと厠ととて詩とあそぶ人のあそぶ
とあそぶあはれとて詩とあそぶあはれとて詩と
あそぶあはれとて詩とあそぶあはれとて詩と
あそぶあはれとて詩とあそぶあはれとて詩と
あそぶあはれとて詩とあそぶあはれとて詩と
あそぶあはれとて詩とあそぶあはれとて詩と
あそぶあはれとて詩とあそぶあはれとて詩と
あそぶあはれとて詩とあそぶあはれとて詩と

永平巻二

永平巻二

坊に... 妙なるの... 仰屋... 歌書... 六十帖... 後... 御

○註曰△神田録ニ思案文字在於此上所謂馬上願上松

上也 △全世壁賦ニ馬上横槊賦詩云 ●陸放翁夜雨

詩支松迷舞龍始奇○新古今信有より 於此

ありけりあわふあめと地うと ▲軍史信長公

長雪隠ノ向ニ蘭丸ヲ持テカフ割鞘ノ數ヲ美譽人

タル類ナリ △無量壽經見定五劫思惟云源中十帖

ノ趣向ハ湖水ノ觀相ニ浮皇ノ都始終ヲ作りトフ

○源公は辨を婉柔のふけりてみまの地とてくまら

そふしあつたる路の証諸より仲孫の思惟とて

源中の親おし合をさるるをくまらとて中くまらとて

これ辨者の優遊とてあまらしき傳と文鑑ありて

蕉河のぬのふ心ありと湖南の松中しとて遺跡あり

愛管辨

苗宰院

あまの... 其名の... ありて... 辨... 蕉河... 遺跡

ちとねく各とさへ命婦のかくさとりしついで下
 のはらへた露とよろぬらうはつれさるるに
 此のあまをたれきん人の益をいひのこあはれ
 穂正王の駒も馬にいひあはううし唐雲美人のやうに
 とあつらひ唐帝の軍と馬雲をまわれて梅葉如
 血とさるあつれあまのあまらあはれんをた中
 しもあつらうちり人のたし雲霞のさきとあつら玉階
 の下にさるあつらあまらうと木をいあまの北の
 かやせ猿と殿中お撮とももくし雷雲雲の雲
 かろしとさやとまおあまのたしあまのあつら

予と百を鼓し雲の雲とあつらし玉雲くくるとる
 しあつら西の雲の雲の雲とあつらしとさる
 しあつらと百令とさるあつらおあつらとさる
 の名にさるあつらあまのあつらあつらあつら
 い雲も雲の雲の雲の雲とあつらあつらあつら
 桐のりはたれさるあつらあつらあつらあつら
 のちれさるあつらあつらあつらあつらあつら
 せくま梅のむとあつらあつらあつらあつら
 ちとさるあつらあつらあつらあつらあつら
 てあつらあつらあつらあつらあつらあつら

くひきさくちもあはれ御の事なれど實の御の事なれども
きとせしあはれこの御の事なれども御の事なれども御の事
めくれ御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
あはれ御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
愛ふおのらも御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
いさめ御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
肌さしの御とあはれて各月の御の御の御の御の御の御の御
おとせ御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
みづらの御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御

ちん月よけも御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
おの御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
て御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
ここの御と御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
一あはれ御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
舌あはれ御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
あはれ御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
早候の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
さるや御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御
うも御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御の御

人のくまんと怪おむと愛の深さなりありし知らむ。併
父さんともうもなす不孝とあるあれは極よあり
行ふこととれくおのむれもありはあそむ
何れも

○註曰▲松双身くくまゆふ所橋をかりぬり終りて
余婦のわくくまゆふありあり▲左傳衛懿公好鶴
棄軍云▲史記楚頂羽歌力技山々氣蓋世々時不
利子雖不逝く厚く厚く奈若何云厚江八敗軍
ノ事り▲唐玄宗復八前出たり▲國文復八太平記ニあり
相撲入道ノ遊り●長恨歌驚破霓裳羽衣曲云
▲晋史王羲之好鶴鳥山陰道士采道徑經換鶴携歸云
▲東鑑ニ云々録作橋改元贈物西行上人上我領之於所也

與放遊盟兒編年通論庵居士伴美昭女隱居
深山賣行漁離給朝食▲女条色中佳尾詩今
亡仲景中右猿万年二琴毛總子桐子作しりトウ▲王美三
堂作一目與他君哉ト云り▲日字ト八尊ノ事ニ月星引
ト余韻ノ長キヲ三光ノ引導ト世秘藏ニ百ナリ梅スルニ
字字ハ和漢ノ助語辭ニ分明トスラ先師ノ大和詞ニイウ
ヲノ親文ヨリ始テ和訓ノ用ト成レリ譬之ハ永同ノ詞鏡ニハ
モいのモ通ニ難久回ハ増テ書法ナシ然ハハ字ノ和訓
ヲ得テ大和ノ當用ヲ称スキナリ▲詩文ニ亂尊ニ狂尊ニ老尊
ト八尊ノ尊ナリ▲益譜ニ金衣尊ト尊ノ一名ナリ○古今集上
あそむり喜々山々々々の所所々々々々あり▲松双身
尊のわくわくくまゆふありあり我語霧濃ト云フ古又ナリトフ

○（以下省略）東桐舎の事
 長歌、そのものの中、これこそまさしく、みどり、むすね、た。又、
（以下省略）
 指物詞、とりて然る、（以下省略）
 八梅下竹、ト、知花ヲ、結テ、（以下省略）
 ○（以下省略）海、云、は、辨、と、方、折、め、（以下省略）

と押さへて、（以下省略）
 と命を、（以下省略）
 況や、（以下省略）
 孰誰、（以下省略）

東桐舎辨

蓮二房

歌の、（以下省略）
 の、（以下省略）
 き、（以下省略）
 の、（以下省略）

北自中より南より嘉禾の杖を用ひてはらひて穀種スレカサの
をありしをあん洋に梅採のてをやうなりし粟柿の
用とあまくれは梅とあまのさちりとあめ梅サシメの
用ゆへむまうたけ桐のれきうやきとやうあんとい
梅柿の肩とさくもさあかんとい果クサリ木のるも
むらもさけけ用やうとい又もあま梅とさあ
鹿牧の園と射しと梅と豊臣の家といはらり
とい和梁の各とあまとい陳子骨といはら打箱
といはら梅といはら梅の家といはら梅といはら梅
ありあ人も官禄の門とい骨とさるも町人官禄の

和といふく富者の家といふとよまるといふは陸王正の
清サヒとさかんといふは梅といは梅の用といは各といは家の
宿あんといはといは運三より梅といはといは梅の
梅といはといはといは梅梅の梅といは梅といは梅
のふかのわありといは

○註曰周史成王前の梧桐葉ツツ以為ツツ主而授ツツ唐叔虞曰
余以此封ツツ汝也歴代備考天正十五年秀吉任ツツ関
白ツツ改ツツ豊臣ツツ云梅といは梅といは梅といは梅といは梅
其葉ト云イ其花ト云ル又ニ照ノ絶妙ト稱スレ△論語
大哉孔子博學而無所成之各梅といは梅といは梅といは梅
限ラス口物万用ニ各人トハ大哉ト稱美セリ朱註ニ梅といは梅といは梅といは梅

とふ一もたのけし尋麻の爵とあつて補依の心と
あつてもとせしやあるあつたる。模の一字をもちりて
依志の一字と後をいれゆると依志松とて
一葉辨のつとらるるなり

○註曰△文選客難東方朔曰如朝等所謂避世於朝庭
之間者也何必深山高岸之下△異同集三處生
耶鄂松ノ夏アリ世ノ知レ所ナリ細考ニ及ス △西
模屏翳ニ云模其皮辟濕圖其形避邪云陸佃曰
然則以辟瘴之事為食惡夢之謂詭狄之模スルニ
節序紀源モモテ模ノ論アト松ノ木口ニ書キ来テ昔野
模ノ觀音モアリ謬ニ瘴ヲ故家ヲ用レ△万葉集ト

假名遣五百十カウ依志古風ノ題トトテ文ヲ早下セシナリ

○評云け辭と字記よりして孫上依志の二字とりて公私の二用
と云ふところもきまり物の上は一人和の履字とゆんを
けり又倫の履海と云れり一移と一作者を記し
堀田氏あり濃南のは早し信も邪令下の四
公卿少解カクハ能階とありて官内大臣有しと云

○説類

木履説

藤之任

下は木履のさも木履を這の行衣此らあはれ祇園
の灯とありしと云れ半あはれの燈と木履いし人切の

して遠く念ねは神の地も青も梅檀とやうの御
 在せしころかり桐と今の世に替へるもよらぬ人
 平より臨みし一ねもやうにさうもなるとさうさ
 ありとよき盲人をばし神の玉もやとるわちこの世
 集まるとぬれぬともとのゆたふとある言と拾ふ
 いかにあるか一はれと天運の山あるまじく山の手後
 ありんかるとかあくと院字う遠く買入れて鎌川
 の電もよあうとととるものも飯かひとらまんと
 じうとをぬれぬともとのゆたふとある言と拾ふ
 してあの花のりいもつとせのしあれは煙をやらんて

錦へりて本殿とつりて朝の庭中へ伸あうりしは
 狼籍のほはらしみれも地のおあてより葉地とぬすむ
 とくはれとつたねらやあんとわくしとらぬけ地の
 せふのや算巻のちまうり後くしよのほねおの集
 猪とあしへあさもらもけの替舞もつりしやれ
 ころころ伊勢うもあさうと世とあつてを様の中
 ありとせまねれと片^{カマシ}とくしとありて居^{イカリ}あうり
 ともころれておのあつとほくしと二十の所の地
 とられい意皆女師の孫よらとこれと集成男子
 の化舞もえげわんきとひ非おのよも館あうと

歎其智至の流とくやまもしくがのるやん

そのりらる

○註曰▲後行者ハ元亨教書ニ傳アリ木履ノ言又ハ別書ニ尋又
 へし▲本朝軍史ニ平忠盛カ火燃ラ抱留スル言モ▲牛ノ名九
 ノ千人切モ世ノ知ル所ニテ細奉ニ及ハス▲梅檀香樹ハ仁經
 説テリ木履言モ又ハ富言テリ▲重ヨリ落スル久未他人
 ナリ諸書ニ在リ細奉ニ及ハス ▲玉鉞トハ道ノ松詞ニ擧ガレ
 盲人ノ事ハ竊ノ玉鉞ト松ヲ重テテ金ト云イ馬鹿ト云ハ
 ル文ノ新續ハ更ニテ此等ヲ錯綜ノ絶妙ト稱スシ ▲晋書ニ
 謝美運好登山嘗着木履上山去前嵩下山去
 後嵩晋史或人有詣阮孚見其蠲屐歎曰未知
 一生當着幾量屐 ▲五条以下ヨリ軒書ニテハ條白ニ

夕負美ノ歌入ナリ其書ニ見シレ擧スル錦小路ハ者ノ為ニ曰ラ
 覆ヒテ常ニ水ヲ灌ク故ニ多ハ木履ヲ帯ナリ此等ヲ諧語滑稽
 ト知レシ ○古今伊勢ノ事多ク竹ノ事ニあま川由也も
 あしぬちをたもせよかりり竹をたあぬる ○これ等
 ちよとをけりくそんおよむるせのちららちかかん
 △平陰經草木園主惠比皆成仁▲法を經ノ電女成仁ノ段ニ
 成成男子ノ言アリ細奉ニ及ハス
 ○評云けいふと今ノ款射とけりハ好ナリ孫ナク成す
 とこと今ノ古語と好ナリ漢ノ虚語ありんやまると
 伊勢ノ事多クあり今ノ事其の次々と志ナリ地ノ事多
 のれとくもことハ法美の訓諺とまねや作れハ伊勢
 成りし尾の澤ノ事多ク嘉道を或ハ市ノ用と擧テ又嘉道

臼杵談

佐佐木山

易辭より句と杵とは信陽の西候よりま歸の暮し
 のひもて言帝の信くせぬよ—ままらきんや
 ららばてつれつらそとさとたむせられうはぬれ
 さらこにあまざん人こや—あめのまらさひに
 ても神の御供も之杵の御のゆき代もけぬの
 らのころらるた五九月のたあ—まら御供く
 ころしは婦まのりゆけし物か本北枝子のまは
 の下急くまらふちう—たれとま城のたは

て信陽の完とらまにあらぬかぬのまらま
 櫃のまらみけし杵とらまらぬはらまら物めるとは
 もまらららららららららららららららららららら
 ららら^キ扱者^{オチ}扱櫃のあら—まら—まら—まら—まら—
 らも^キ扱^{オチ}扱櫃のあら—まら—まら—まら—まら—
 まら—まら—まら—まら—まら—まら—まら—まら—
 きのわら—まら—まら—まら—まら—まら—まら—まら—
 のまら—まら—まら—まら—まら—まら—まら—まら—
 まらとまららのあら—まら—まら—まら—まら—
 きのの所まのまら—まら—まら—まら—まら—
 秋と取すら—まら—まら—まら—まら—まら—まら—

杵のけしきもきもあつらんはねさなぬのねのくひ
山川下りしのかたとまねとまふかしの神の後継
はきもあつらんはねさなぬのねのくひ

○註曰易繫辭黃帝下斷木為杵塚地為何法杵之

世後瑞之易辭上言言言黃帝始ラ云の存ヤ△に杵

佛説の行勢が古記より前ニ出タリ ●東坡句詩ニ雙金破

混流能は○後成之をふまやとへのつらうの二つらう

りらうやまはらあのおひあり ●論語思也思也

●班本力カ羽歌ハ前ニ出タリ△源中明るを採ぬりあり

とまもあつらんはねさなぬのねのくひ

れはきもあつらんはねさなぬのねのくひ

(一) 漢はは説と全く語諧しして黄帝のちよ
さぬのとつらんはねさなぬのねのくひ
もつらうやまはらあのおひあり
とまもあつらんはねさなぬのねのくひ
れはきもあつらんはねさなぬのねのくひ
れはきもあつらんはねさなぬのねのくひ

眠五説

東荅坊

けあしご代の風雅ありても祖と眠不占といひて又と
眠説しつ小娘語を我あふまはらあのおひあり

らたふらふら子職年々茶坊ありて今の子は
何れも色せきしく知の風雅も睡りて今の子は
天より祈む地を祈む人より祈む月を祈むを
はて能く祈むるもせきれ天地人より祈む
天地人のありれもさるるをさるる能く祈む
のついで次に月を祈む月を祈むといふも
さるるを祈むといふ風雅と云ふはさるるの
さるるのついで次に月を祈む月を祈むといふも
さるるを祈むといふ風雅と云ふはさるるの
さるるのついで次に月を祈む月を祈むといふも
さるるを祈むといふ風雅と云ふはさるるの

いふはけふの北と睡りて茶をいふ名
さるるはれいともお茶をいふ名
いふはけふの北と睡りて茶をいふ名

○睡りて語を虚説ありて睡りて五州の事と説く例の
く例のさるるを虚説の常用といふはさるるの
越の北は津より石隈夜より津より一方向の新茶を
月を祈むる茶の各言とありて昨よりは茶の諸語といふ
お茶をいふ名とて茶の諸語といふはさるるの
さるるのついで次に月を祈む月を祈むといふも
さるるを祈むといふ風雅と云ふはさるるの

搔餅記

陳素六

いふはけふの北と睡りて茶をいふ名

よりより川の上カハノとさるをぬいしとあせく境の
振ウをさあつて殿のさうあらをそれより七郷
とさるてを一してたむ軍のはけりて遠きけり
たをさかゆれい舞米の殿とやうくさるて
枚子ウキより振ウありを振ウりてあつてさうありた
名もたあつて振ウとさるてさうの比さるて入る
し舞ウ合ウよりあつてさうけりてさうの舞ウ
とあつてさうをぬりてさうの舞ウと振ウと
さるてさうのさるてさうの舞ウとさるてさうの舞ウ
とさるてさうのさるてさうの舞ウとさるてさうの舞ウ

たのら舞家のほけりてさうの舞ウとさるてさうの舞ウ
とさるてさうのさるてさうの舞ウとさるてさうの舞ウ
とさるてさうのさるてさうの舞ウとさるてさうの舞ウ
とさるてさうのさるてさうの舞ウとさるてさうの舞ウ
とさるてさうのさるてさうの舞ウとさるてさうの舞ウ
とさるてさうのさるてさうの舞ウとさるてさうの舞ウ
とさるてさうのさるてさうの舞ウとさるてさうの舞ウ
とさるてさうのさるてさうの舞ウとさるてさうの舞ウ
とさるてさうのさるてさうの舞ウとさるてさうの舞ウ
とさるてさうのさるてさうの舞ウとさるてさうの舞ウ

△
 ちる川のほくをこをさつたお舟とふれぬもあつし
 けららさうにさうたてくをさの舟あのみてあふら後
 中子とてかたにうらまへしつれいふきき
 かのめらちうそつれとけいひあまきあふら
 かにしりてはてふお色しりあまのあま
 藤とあまの秋しらも舞ふ河橋のうたてふ富
 自在とて文とつてお舟とてあも舞のあに
 といふも舞のあまをけいけいあまのあま
 舞のあまをけいけいあまのあま

○註曰△東鑑千葉、以常胤賦^{ス境}境^ハ或説^ニ境^ハ飯

心ス中豆ヲ用エトフ△定家婦ハ頼家公ノ和歌ノ師ナリ入道^ト
 ニ鎌倉若下リ玉ヲ交アリトシ拵ルニ此段ハ定家卿ニ彼侶道
 ノ撰アルヨリウきくふいへノ論ヲ設テ^{ケキ}拵^{ケキ}トノニ用ヲ賦ハス
 去ル先師ノ大和詞ニ和詞^ニ假名直名ノ两用ヲ知テ^ハ埒ノ明又
 直アリトハ此等ノ女子^ヲ美ラユルニヤ△店^レ竹^ハなすあふ
 ちちあうに^ハかひめち^ハあふ^ハあふ^ハあり○地^ノ名^ハ
 あまりて^ハかみ^ハも^ハり^ハ所^ノあ^ハい^ハせ^ハめ^ハは^ハた^ハ
 △白川夜舟トハ俚語ニシテ愛モ知ラヌ又ノ形容ナリ拵ルニ
 一辭別名以下ハ文ニ錯綜ノ術アリト云ハ去ハ難波ト云イ^ハ信^ハ執^ハカト
 云イ善悪ノ所法ノ大騷ナルモ^ハ耳^ハ竟^ハハ音ノ二字ニテ前後ノ用ヲ
 結シトナリ然レハ^ハ藏^ニ頭^ノ格ニ似テ^ハ此^ノ等^ヲ云^ハ上^ニ夢^ノ絶^ヲ稱^ス
 スヘシ△古^ノ集^ニ存^シ琴^ノ唱^ノ歌ニ^ハサ^レ路^ニと^ハシ^ク多^クよ^キ名^ハ在^リ荷^トとい^ハも

十一卷

十一卷

〇海云い説くと例ありし七名の中にかの藤と新といふくの通語より御の風情をたゞるこれに依て
 他浩の名説いて目立ちしといふらるる一は備
 の結文と称する一は子の子をいふ備の
 の富言よりいふん作者は何れの名をいふて
 或は京師より或は尾城よりと陳を叙して
 依り都と氏とをまきり尾城下の地名ちゆりそ
 一辨ふ名のはきりし一

文端三巻之五終

